『オイディプス王』ノート

逸身喜一郎

ギリシャ語の知識がなくそれまでギリシャ悲劇を読んだこともない学生諸君を相手に、翻訳を使ってギリシャ悲劇を、かなり細かな語句にまでたちいって講義する機会があった。こういう場合、ソポクレスの『オイディプス王』は省くわけにはいかない。あまり論理的ないい方ではないが、この劇をおもしろいと思わない人にはそれ以上ギリシャ悲劇、ひいてはギリシャ文学を語っても仕方ないではないか、と思うところがあるからである。

さいわいなことにこの劇には、藤沢令夫氏の秀れた訳が岩波文庫に入っている。そこでこの翻訳をもとに講義をした。はやりことばでいえば「『オイディプス王』を読む」である。

しかし翻訳の常として、ある線を越えた細かな議論になると、当然「私ならこうは訳さない」とする個所が見つかってくる。これはその訳が正しいとか誤っているとかいうことではない。翻訳もまた一つの解釈である。そして私には私の解釈がある。

本稿はこの過程で、特にこの劇全体の意味づけと大いに関係を及ぼす「運命」という日本語を中心に、私が藤沢訳、ひいてはそのもとになっているR・C・ジェブの注釈と訳からはなれたところを集めたものである。昨今の多くのギリシャ学者同様、私もギリシャ悲劇に「運命劇」という枠組を持ち込むべきでない、と考えている。ところが、ギリシャ悲劇＝運命劇、という図式が、学生諸君には本を読む前からいきわたっているので、私の講義はそれを壊すところから始めなくてはならない。その際、用いるテキストに「運命」という日本語が頻出するのは、いかにもまずいのである。念のためくり返し記すが、私はここで世にいう「誤訳指摘」を行うつもりは毛頭ない。

なお藤沢訳の引用は最小限に抑え、かつ文脈の説明も省いた。したがってお手許に岩波文庫を用意し、見較べつつ読んでいただきたい。引用は岩波文庫ならページ下方に十行単位で記されている、原典行数で指示する。

私は本稿を、登張正實先生の成城大学を停年退職されるにあたり、記念論文集の紀要に加えていただくべく昭和六〇年秋より書きはじめた。したがってまず考えたことは、登張先生におもしろく読んでいただけることであった。また当然ながら、藤沢令夫先生のことも念頭にあった。

しかし、(いつも私を好意をもって遇して下さった登張先生に、失礼にあたることを承知の上で)実をいうと、本稿を書きすすめている時の第一の仮想読者は、あしかけ二〇年、教えを受けた斎藤忍随先生であった。斎藤先生の批判と、それとともに幾許かの賞め言葉をも期待して、私は一行一行を書いていた。ところがその最中、本稿をお見せすることのできぬまま、先生は昭和六一年一月二一日、亡くなってしまわれた。

昭和五九年春、斎藤先生が成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科西洋古典学担当の職務をおやめになった際、文芸学部は私を後任として選んで下さった。先生が停年にも達していないのに辞職された時、先生の人柄を慕う成城の方々はとても残念がっておいでであった。なかでもA教授は再三再四、先生のおやめになった理由や消息をお訊ねになったので、私はある時、冗談に、斎藤先生に「A先生は私をまるで父親殺しのあげく王権を簒奪したかのように見ていらっしゃる」と、オイディプスにひっかけ申し上げたことがある。斎藤先生はその「父親殺し」という表現が気に入られ、「誰がそれをいい出したのか、Aか君か」とお尋ねに

なった。私が自分であると答えたところ、「そうでしょう。Aはそんな気のきいたことのいえる男ではないのです」と笑われた（もちろん斎藤先生はA先生を好いておられた）。その後何度か、先生と私は「父親殺し」ということばを使って冗談をいいあった。ところが今、予想だにしなかった年齢で先生を、「わずかな重みが眠らせてしまった」。

オイディプスを、ソポクレスの二つの劇もそのもとたる神話も、先生はお好きであった。おなくなりになる直前まで非常勤講師として大学院でおやりになっていたのは、ヨーロッパ文学における「オイディプス・モチーフ」の研究である。先生の中では、オイディプスがソクラテスに、そして先生御自身に重なりあっていた、というのが、やや感傷にすぎるが私の今の想いである。

先生のオイディプスについてのコメントはいくつも次々と思い出されるが、しかしそれは氷山の一角でしかない。私は自分の論考の批評をしていただくという形で、水面下をいま少しのぞいて見たかった。もっと本稿を早く書き上げなかった悔悟の念はどうしようもない。御冥福を祈る。

（昭和六一年三月脱稿）

一〇八〇―八三行

「さあれ、恵みぶかきテュケ（運命の女神）の子をもってみずから任じるこのわしは、けっして何ものによっても、辱しめられることはないだろう。げにテュケこそは、わがまことの母、そしてめぐる月日は、同じ母もつわが兄弟。わしはその歳月の歩みにつれて、卑小になることもあったし、偉大になることもあった。」

私は一般にテュケー（τύχη）を「運命」という日本語に訳すのに反対であるが、とりわけこの個所のテュケーは「運命の女神」としてはならないと思う。私なら「偶然」とする。もしこれがあまりに原義とはなれすぎるというなら「運」とする。

「運命」と「運」とは同じではない。「運命」の意味するところは、人がどうもがこうと変えることのできない「さだめ」であろう。しかるに「運」のほうはあたかも偶然のように起こるもので、ただ偶然と片付けるにはあまりにもタイミングよく起こるためその背後に何らかの必然が（法則が）あるのではないかと思わしめる、そういった「めぐりあわせ」であって、「運命」のようにははっきりとその存在を指しうるものではなく、あくまで「偶然」として受けとめようと思えば受けとめられるものである。

古典期ギリシャでは、細部に至るまでがんじがらめにあらかじめ決定されていて、個人の意図ではどうにも動かしようもない「運命」というものは考えられてはいなかった。[1] ただ死だけは人間がどうすることのできないものであるから、「死」と結びつけて各人の分け前としてとらえられた「運命」ならば考えうる。その意味でギリシャ語のモイラ（μοῖρα）は「運命」であり「死」である。しかしこのギリシャ語とテュケーとはもちろん意味が交錯することもあるが原則として区別されるべきであろう。

「運」の存在は、およそ時と場に左右される人間には常に察知されうるものである。人が自分を恃む気力にあふれている時、たとえ予想を超える不幸が生じようと、それは偶然おこったこととしていいきることができるが、その場合「不運であった」といってもほぼ同義であろう。彼の自恃の念は「運」ということばで

傷つかぬどころか、一層際立つ。つまり「運」は個人の努力と両立する。しかるに「運命」の場合、個人がどれだけ努力しようともその核心部分は変えられない、という決定論の考え方によっている。この差は大きい。テュケーはモイラと違い、「運が良い」「運が悪い」の「運」として理解すべきである。

オイディプスがここの場面で自分を「テュケーの子」と宣言する時、自恃の念に満ち満ちている。自分の兄弟たる「時」(文字通りいえば太陰の運行によって定められる、時の区分としての「月」)によって、自分の大きくなったり小さくなったりした証をつけられても、所詮それは「めぐりあわせの子」「偶然の子」である以上当然のことであり、自分が自分であることに変りはない。彼は有為天変があらかじめ定められているとは毛頭考えてはいないのである。

つけ加えると、この段階でのオイディプスは自分を私生児であると想定している。彼の自己探求のそもそものきっかけは――それは「ふとしたこと」と表現される(七七六行)。その原語もテュケーであることに注意されたい――コリントスで酒に酔った男が彼を、「父親に対し捏造された者」(藤沢訳だと「父親のほんとうの子供ではない」)と言ったことにはじまった。[2]「たとえ三代続いた奴隷の子であっても」彼の彼たる所故はいささかも変りはしない、というのが彼の自負である。だからこそその母をテュケーになぞらえているのである。

九七七―七八行

「人間には、運命の支配がすべて。先のことなど何ひとつ、はっきり見とおせるものではありません。」

「運命」と訳されているのはテュケーである。テュケーが人間を支配しているとイオカステがいう時、その意味は先にあげたオイディプスのことばに較べはるかに軽い。彼女の立場は、ケ・セラ・セラである。つまり成り行き任せにしか人間の生きようがない、とする。たしかにこういう、ある意味では楽天的な人をも「運命論者」(fatalist) と現代語で呼ぶこともあろう。そういう用法を承知のうえで読めば、なるほどテュケーは「運命」でもよいのだが、ややもすると人間の「全てが決定されている」と誤解されてしまう。ここはそうではない。あくまで「めぐりあわせ」なのである。

九四八―四九行

「その人はいまや、自然の運によってお亡くなりになったのです。」

ここで「自然の運」とかなり苦労して訳されているのも、やはりテュケーである。これを日本語のイディオムにあてれば「寿命」とでもなるだろう。説明上「めぐりあわせ」は有効である。

八〇―八一行

「おお、わが主アポロン、どうかあの輝かしい顔つきそのままの、輝かしい救いの運命を彼がもちかえりますように。」

ἐν τύχῃ τῷ σωτῆρι を文字通り訳せば、「救い主であるところの幸運（テュケー）に包まれて（あるいは「伴われて」）である。「救い手となるべき幸運」とまで言ってもよかろう。ここのテュケーはかなり人格化されている。

ところでこの劇の中で「救い主」（σωτήρ）という単語の使用されるのはここだけではない。四八行ではオイディプスが（藤沢訳「救い主と呼ばれているお人」）、一五〇行ではアポロンが（「このうえは、おんみずからきたりてわれらを救い」。直訳すると「救い主として来たれかし」）、三〇四行ではテイレシアスが（「救うことのできる者」）、それぞれ、テーバイの救い主である、あるいは、あってもらいたい、と、この語を使って呼びかけられる。そしていうまでもなくそのうちの誰一人、テーバイを救えない（救わない）。

これらも相当にアイロニーを含んでいるが、しかしはるかに強烈なアイロニーが一〇三〇行の、コリントスからの使者のことばに見出される。

「でもあの時には、わが御子よ、あなたさまを救ってさしあげた者。」（藤沢訳）

「救ってさしあげた者」が、今とりあげている同じ単語 σωτήρ である。はたしてこの男は、自分で思っているようにオイディプスの救い主であったのか？　一体、赤児のオイディプスをコリントスに連れてゆくことでオイディプスの何を救ったのか。

もしこの一〇三〇行の苦いアイロニーを八〇行にも投影するならば、オイディプスの「救い主たる幸運（テュケー）」という表現もオイディプスがことばの表層でいいあらわそうとしている意味より深い意味を有

することになる。藤沢訳の「救いの運命」ではどうも意味がとりにくい。

テュケー（τύχη）という単語の使用例はまだまだある。以下、傍線を引いたところはどれもこの語そのものである。

五二行　「あのとき幸先よき兆のもとに、わたくしどもに仕合せをあたえてくだされた」

一〇二行　「血が流されたと告げたもうのは、何びとの身の上のことであろうか。」

二六三行　「事実はその前に、不慮の運命（さだめ）がかの人の頭を襲ったけれども。」

四四二行　「ところがそのことにかけての、あなたの幸運こそは、その身の破滅をまねいたものなのに――」

六八〇行　「その前に、この出来事がどうしたわけかを、知らねばなりませぬ。」

七七三行　「げにこのような重大な時にのぞんで」

七七六行　「これから話すような、ふとしたことがこの身に起るまでは。」

一〇三六行　「あなたがいまのお名前で、呼ばれるようになりましたのも、そのことのため。」

ギリシャ語が同じ単語だから、日本語も一貫しなくてはならない、というものではないこともちろんである。さらに τύχη なる語は、いつもがいつも、十全たる意味をもつわけでなく、イディオムのように使用されることも確かである。しかしこの劇においてテュケー（τύχη）が、要所要所であまりにも頻繁に使われていることも注意されてしかるべきであろう。

諸事件が「たまたま」「ひょんな具合に」そうなったとオイディプスは思っていても、実際は「なるべくしてなった」というのが実情であることを知っている読者（観客）には、これらの些細な用例すらいちいちアイロニーとして響くこともある。

ここで、私が、（オイディプスやイオカステのその場その場の考え方の分析ではなく）劇全体が伝えている「メッセージ」との関わりで、偶然と必然との問題をどう考えているか、記しておくべきであろう。というのは「個個のセリフの解釈はさておき、この劇を全体としてみれば、人間の逃れがたい運命の存在を指示している、ところがそれをオイディプスは単なる『運』と思いこんでいるだけだ」という見方もなりたつからである。

私は「おそろしいまでの偶然のつみ重なり」を、「運命」から、どうしても区別したい。なるほど私たち

はオイディプスが予想した最悪の事態より一層おそろしい事態が、自己を恃むオイディプスの背後にあることを見せられつづける。そしてひとつひとつの出来事がそれだけとりあげてもめったに起こりえない偶然であるがうえ、その連鎖となれば一層、ありえないことも分かるよう強いられる。おまけに個々の偶然の背後にはアポロンの姿がほの見える。少なくともアポロンの神託は事件を進めてゆくにあたり重要なモーメントである。

しかしながらそれにもかかわらず、同時におさえておかねばならないことは、一つにはこの劇の筋が扱っているのは、オイディプスの出生から父殺しまでの事件ではなく、彼の自己探求の過程であること（この過程においても「偶然」が介入しているが、それ以前の出来事諸局面の比ではない。イオカステの「ライオス殺害」描写や、コリントスの使者の善意から出た「オイディプス出自」のいきさつは、いずれ明らかにされるべきものであった）、二つにはアポロンはついに姿をあらわさないことである。

「人間は何でも知りうると思ってはならない。どんなに計算しつくしたつもりでも、予想しえない事態が襲いかかってくる。人間はとことん無知なのだ。」

これがこの劇のもつメッセージのひとつだと私は思う。しかしこれだけではない。この後につけ加えるべきは、「だからといって、人間には知の及ばない領域があるという理由をたてに知ろうとする努力を放棄してしまった時、人間は人間たるべきことをやめることになる。たとえ知ってしまった結果が破局であろうとも知ろうとするのが人間であり、そこにこそ人間の偉大さがある。知るは破局、知るのを止めることは堕落、というのが人間存在だ」ということではなかろうか。

とすれば、人間の能力では測り難い、あるいは測りえない「必然（すなわち「運命」）がある」と言い切ってしまっては、知るのを放棄することとなる。偶然と必然とは、静的に対立して存在するものではない。限りなく「必然」に近づいたようにみえても、やはりとらえようもない、法則を拒絶する「偶然」しか見えてこない、そういうダイナミズムこそ「世界」であろう。

そのようなダイナミズムを描こうとする立場からは、アポロンは舞台に登場させることはできない。アポロンの姿はほのみえる。しかし人がアポロンのいる地点までたどりついたと思う時、アポロンはもっと遠くの暗闇に退いてしまっている。

藤沢訳では、「運命（さだめ）」という表現が、原文には書かれていないところで三回、補われて訳されている。

一二四五―四八行

「亡くなられてすでに久しいライオスさまの名をお呼びになりました。呼びつつあのかたの想うのは、遠いむかしにその人によって生まれた子供のことであり、その子の手にかかって父親みずからの命は失われ、とりのこされた母親は、自分の生みの子との間に子種をなすことになった、そのいまわしい運命（さだめ）のことだったのです。またあのかたは、結婚の臥床をお歎きになりました。」

「そのいまわしい運命（さだめ）」とは、どこにも書かれていない。「その子の手に」から、「子種をなすことになった」は、「生まれた子供」を先行詞とする関係文である（正確にいうと後半はそうではないがこう書いておく）。さらに訳しづらい構文を分かりやすくするための工夫と承知しつつも指摘すれば、「とりのこされた母親」は適切ではない。ここはどうしても、ライオスを、動詞「残す」の主語のまま訳さねばならない。さもないと、

「ライオスよ、あなたは、自分はオイディプスの手にかかって死んでおきながら、私、オイディプスを生んだイオカステの方は、オイディプスと子供ならぬ子供をつくるべくあとに残して放り出して行ってしまった」

という、イオカステのライオスにあてた呼びかけの苦さが表に出てこない。

つけ加えるに、関係文中の「死ぬ」と「残す」は希求法で書かれている。それはイオカステのことば、もしくは考えを伝える、間接話法であり、ここの話者による事実の叙述ではない。(3)

「亡くなられてすでに久しいライオス」も「もはや、死体となったライオス」という文字通りの表現が有する生々しさと少し遠すぎる。「想う」という漢字からも、激しさが伝わってこない。しかも *σπέρματα* が「子供」の意味で使われる用例の多いことを承知の上で解釈すれば、ここでまず出すべきは原義に近い「種」であって、「あの時の種」転じて「あの時の性交」を思い出しつつ、イオカステはライオスを呼んでいるのである。(4)

さらに激しさを増すのは続く夫婦のベッドに向けて発せられた歎きで、彼女は「結婚の臥床を」歎いたのではなく「臥床よ！」と歎いたのである。(5)

四五四―五六行

「ほかでもない、いまあいている眼はつぶれて盲となり、富は失われて乞食の身となり、杖もて道をまさぐりつつ、みしらぬ他国の地をさまよう運命が、彼を待っているのじゃ。」

「運命が彼を待つ」という、原文に見当たらない表現は、「彼が……となることが決まっている」という意味の、日本語の成句というべきか。しかしここは「彼は……するであろう」という未来形である。

ここのところを翻訳だけで読めば、オイディプスが盲目になることも、この段階ですでにオイディプスとは関係のないところで決定していることになる。しかし予言者の常として、たとえばカッサンドラのように、テイレシアスには未来の一場面が見えてくるのである。それを叙述するのは未来形をおいてない。もちろん予見能力のある者の眼に写る事態は結局のところ「待ちうけている運命」と同一だともいえる。ただしそれがいえるのは予言能力者当人か、予見能力者のいうことを全部信じ、その通り動く者においてのみ妥当する。「トロイアは滅ぶだろう」という予言は、実際にトロイアが滅んだことを知っている後の世の人々（我々読者を含む）になにかしらパセティックな精彩を加えることがあっても、英雄たちの諸エピソードで、ギリシャ人・トロイア人双方が死力を尽くすのに何ら違いをもたらさない。

それと同様に、ここのテイレシアスの予言がおそろしいのは、私たち読者が、やがてオイディプスがテイレシアスのいう通りになることを、既に知っているからである。やや脱線になるがここでメモとして記しておくと、ホメーロスや悲劇の予言のように文学作品に描かれた予言を、往時のギリシャ人の宗教・世界観と、あるいは現実の政治世界においてデルポイの果たした役割と、関係づけて読むこともとより大事だが、それにもまして、「時間」をゆさぶり、事件を相前後させる「語りのテクニック」の一つとして分析するべきだ、と私は考えている。予言とは、登場人物にとっては「近未来」であるが、作者にも読者にとっても「過去の時点においての未来」で、すでに「完了」しているのである。

ギリシャ悲劇詩人が登場人物の「現在」に、「過去」と「未来」とを挿入することにどれだけ心をくだいたか、はアイスキュロスの『アガメムノン』一つを抜きだしても明白である。さらにいうとテイレシアスのことばは、ここで訳されているよりもっと謎々の口調である。

「ことばの上では外国人だが、その実、生粋のテーバイ市民たる姿をあらわすだろう。……もの見える者から盲目に、富有たる代わりに乞食にと姿を変じ、杖を前に、外国をさまようだろう。……」

おそらく端的に

「外国人だが血筋はテーバイ人、目あきは目くら、富者だが乞食、父にして兄、息子にして夫、共に種蒔く者にしてその殺害者、そういうものが姿を現してくる」

とでもいうのが、いちばん真意をつかんだ表現かもしれない。[6] 子供の謎々に「上は大水・下は大火事」（答は風呂）というのがあるが、それと同様、本来ならば矛盾する二概念が種々の形をとって衝突し、その答は

「オイディプス」以外にはない、というのが、謎ときを誇るオイディプス――いうまでもなく彼はスフィンクスの謎をといたからこそ、王となった――に投げつけられた謎なのである。

これに付随して、

四二五行

「それらはやがて、あなたをまことの素姓にかえし、みずからの子らと同じ身分におくであろう。」

「まことの素姓」という日本語からは、謎は完全に消えてしまう。やはりここは謎らしく「あなたをあなたに、そしてあなたの子らに、等しくしよう」という直訳でいいのではないか。

ただここのテキストは、ヴィラモーヴィッツの校訂をうけ入れ

「あなたがあなたとあなたの子らに等しく与えようとしている（その他の凶事）」とした方が、確かに筋は通る。

一三二九―三〇行

「こうなったのはアポロンのため、親しき友らよ。それはアポロン――このわしの　こんな苦しい受難の運命（さだめ）をもたらしたのは。」

このギリシャ語のとりようは色々考えられるが、少なくとも「運命」とはどこにも書いてない。最初の *τάδε* を、私は *κακὰ πάθεα* にかけることなく、「それ（すなわち直前の問で尋ねられた、オイディプスをつき動かし、眼をつぶさせた力）はアポロンである」または「アポロンこそそれである」と読む。そしてアポロンにかかる分詞句が「この（あるいはこれらの）災いを今、完成せしめている（ところの）」である。

おそらく *πάθεα* が指すのは、目をつぶしたことだけではなく、父殺し・母との結婚も入るだろう。しかしそれらは「災い」であっても「受難」だろうか？

たしかにオイディプスは、父殺しも母との結婚も、その他およそ彼が自分の判断で処してきた諸行動全て、それのみが彼の出生のように彼がいかなる意味でも選びようのなかったことに至るまで、端的にいえばオイディプスがオイディプスであることが、アポロンのしかけたわなと知った。しかしそれは「アポロンが企て、その企てにのったのが自分である」との意で、自分がアポロンの傀儡であった、との告白ではない。

テュケーではなくモイラであるが、「運命（さだめ）」という字の使われているところで気になる個所がある。まずはライオスの受けた神託である。

七一三―一四行

「そのお告げによりますと、わたくしとあのかたとの間に子供が生まれたならば、ライオスはその子の手

にかかって、殺される運命（さだめ）にあるということでございました。」

ライオスに下った神託には、ギリシャ語では条件節は含まれてはいない。「誰であれイオカステとライオスから生まれる子供によって彼は死ぬと決まっている」というのが予言の内容である。子供を生んだならば死ぬ、そうでないならば死なない、というのではないし、いわんや、子供を作るな、というものでもない。しかし「生まれたならば」という日本語からは（あるいは受胎調節なる現代の常識に歪められてか）「生まなかったならば」という、逆の仮定をつい想像しがちである。

もっとも、子供によって死ぬと決まっているのなら子供を生まなければいいのではないか、と考えるのが人間の小賢しさとでもいうものであろう。この予言においては子供のできることも決まっているのである。[7]

しかもこのソポクレスの劇では、いつ、この予言が発せられたかは書かれていない。私たちは、予言—性交—誕生、という順序を考えがちでありそれはそれでおそらくあたってはいるのだろうがこの劇内部にとどまる限り、オイディプスの誕生をもはや阻止できない段階に達して、この予言が下ったとも読めるのである。[8]

ライオスは子供が生まれたのち、予言の効力を消そうとした。しかし予言から逃げようとすればするほど、予言の実現に手を貸すこととなっているというのが、予言のいやらしいわなである。オイディプスの場合にそのことが一層顕著であるように。

しかもライオスの場合——後の（一一七三行）記述に従って、嬰児のオイディプスを「羊飼の男」に手渡したのがイオカステなら、彼女もまた同罪である——生まれたばかりの子供を殺させる、という人間の根本の

道義と感情に逆らうことを、赤児殺しを頼まれた男ですら「不憫で殺せない」というのに、我が身を助けるために行いその結果、年月を経たのち自分がその子供の手で殺されてしまう。これだけ抜き出せば因果応報譚を構成している。

もしも仮にライオスが予言を、それもしかたないと平然とうけとめ、子供を生み育てていたならばどうなっていただろうか、という問は、もちろん無意味である。しかし、そうなっていたならばと一瞬、観客（読者）に想像させ、直ちにその問の無意味さに気づかせる（あるいは気付かず考え続ける者がいても構わない）こともソポクレスは計算しているだろう。こう想像することは無意味ではない。

いささか揚げ足とりになってしまうが、オイディプスが自分の受けた神託を引用する時にも、原文には「運命（さだめ）」にあたることばは使われていない。

七九一―九三行

「ほかでもない、わしは自分の母親と交わり、それによって、人びとの正視するに堪えぬ子種をなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう、というのだ。」

藤沢訳でもここだけは「運命」なしに訳されている。直訳すれば「母親と必ずや交わることとなる……人目に露すだろう……殺害者となるであろう」である。最初の文章には「義務・必然」を表わす動詞 χρή が

使用されている。

八二五—二七行

「もしもそれをおかすならば、おのが母親とは婚姻によってむすばれ、この身を生んで育てたもうた、父上ポリュボスを殺す運命（さだめ）が、わしを待っているとは！」

原文の関係部分を直訳すると、

「さもないと、私は母と結婚し、父を殺さねばならない」である。δεῖ が使用されている。

九六七行

「わしは自分の父親を、殺す運命（さだめ）にあるということであった。」

「殺すはずであった（ἔμελλον）」というのが最も近い訳と思う。

九九五—九六行

「わしは自分の母親と交わり、また父親の血をこの手によって、流さねばならぬ運命（めだめ）にある、と。」

「必ずや……交わり、殺す。」七九一行同様、*χοῦραι* である。

偶然と必然のあわいについて、小さいことをひとつ。ライオスとオイディプスの遭遇した地点は「三叉路」である。二人の人間が三叉路で行きかった、ということは、もし何らかの事情がちがえば一人が別の道をとり、結果として二人は出会うことがなかったかもしれない、という可能性を映像としてうかび上がらせる。これを「野中の一本道」と比べてみればその違いは明瞭だろう。(9)

藤沢訳では *τριπλῆ κελεύθος* が「三叉路」とも訳されているが（八〇一行）、多くは「三筋の道の合わさるところ」となっている（七一六行・七三〇行・一三九八行）。これだと「偶然」より「必然」の方に重きがかかる。その理由から「合わさるところ」という、原文にはないパラフレーズには反対である。「みつまたの道」つまり「三つに分かれるところ」である。

「深読み」を付け加えれば、*τριπλῆ*（「三重の」）は、*διπλοῦς*（一二五〇行、藤沢訳「二重の母となられた」、直訳「二重の生まれくる者を生んだ」）、*διπλῆν ἄρουραν*（一二五七行、藤沢訳「二重に宿した母親」、直訳「二重の（畑の）畝」）と響きあっている。ついでながら、後者においてこの前後（一二五五―五七行）

「わたしたちに刀を持ってこいと命じ、妻にして妻ならざる人、自分と自分の子らを二重に宿した母親のありかを、探し求めておいでした。」

は、日本語にしてしまった場合の卑俗さをおそれてか、やや婉曲にすぎはしないか。

「妻ならぬ妻、俺と子供双方の、母の二重の畝に、どこで俺は会えるのか、と求めつつ」（「母の」は形容詞で、「畝」にかかる。）

オイディプスが刀をもってはやり立っているのは、単にイオカステその人を求めてではない。彼の怒りは暴力の形をとり、子を生む母の胎、彼を種から育てあげ彼自身もそこに種をまいた「性」それ自体へ向かっている。

三七六―七七行

「いかにもあなたの破滅は、このわしなどによってもたらされる運命（さだめ）のものではない。事はアポロンのみこころによるもの。その力によって、成し遂げられずにはいないのじゃ。」

前半の「運命」はモイラである。ここでむしろ問題にしたいのは「みこころによる」という訳語である。このいい方では、アポロンにオイディプスの破滅が委ねられていて、しかもアポロンが、破滅の時期・方法、さらには実施するか否かまで、心のままに決定するようにうけとられる。そうかもしれない。

しかしここで肝要なのは、ギリシャ語の一番表面の意味がもつ（直訳すると「これらの事を成就する権能をもつアポロンが十全たる力をもっている」）、アポロンがオイディプスを滅ぼすに「十全たる力をもっている」という、力の差異の表示である。

テイレシアスとの応酬の際、オイディプスは自分の力のもとであるおのれの知恵を信頼している。その彼

のとらわれている常識からして、「盲目」のテイレシアスは、すなわち「無力」であると侮辱されるのである。

しかしテイレシアスからすれば、オイディプスは目の見えるはずが何も見ておらず、知恵あるはずが愚かで、力あるというものの無力だ、ということになる。

「アポロンが十全たる力をもつ」ということの意味は、「アポロンがオイディプスを滅ぼす力をもつ」であり、これを敷衍すると、オイディプスのよって立つ「知恵、すなわち力」という自負を打砕く力がある、となろう。

オイディプスは己の知力に自負がある。そもそも彼がテーバイの王位についたのは、英雄譚にありがちの、武力によって敵を打ち負かしたからではない。この種の話としては異様な設定であるが、スフィンクスはオイディプスの知恵、ただそれだけに屈服したのである。オイディプスが「知力の偉業」を誇っていることは、要所要所で明らかになる（著明な例、三九七行。それへのあてこすり、四四〇行）。そしてそれはこの劇の冒頭部で明らかなようにテーバイ市民全体に認められたことである。

オイディプスは、自分の卓越した知力を傲っているのではない。知力に秀でた者として、この劇の始まった時点で疫病阻止の対策が求められるが、彼はその責任を果たそうとするのである。しかもその「解答」が、ライオス殺しの犯人を見いだせ、という「知力」の領域にかかわることである以上、オイディプスは自己の王たる存在理由をかけてそれを解かねばならないのである。

実際、謎があり、かつ秀れた知力を持つ人間がいると、その者はたとえ他人が止めようともさらには自分

ではこれ以上謎をとくことが危険であると察知しようとも、その謎をとかざるをえない。人間をして謎をとくようにしむける力、今日、毒を抜いて「知的好奇心」と呼ばれるもの、これをアポローンと、あるいはダイモーンのひとりと呼んでもよかろう。ちょうど性欲がアプロディーテーと、処女の純潔執着がアルテミスと、正妻の家庭内秩序感覚がヘーラーと、殺戮心がアレースという風に名を与えられ、外から人間に襲いかかる力としてギリシャ人に理解されたように。

私のダイモーン理解は少し限定がすぎるかもしれない。しかし藤沢訳で

一三〇一行

「どんな悪意のダイモーン」（「悪意の」は原文にないパラフレーズ）

一三一一行

「おお　わが運命（ダイモーン）よ」

一三二八行

「いずれの神が　あなたを唆したもうたのか？」

と訳し変える必要が、特にダイモーンという片仮名語まで使ってまで、あるのだろうか。

オイディプスは、劇の始まった時点では、アポロンの恐ろしさを知らなかった。しかし決してないがしろにしていたのではない。自分が誠心誠意頼んだ時には助力が得られるだろう、との「対等」の関係を期待していたのである。

ところがアポロンはオイディプスの「出生」も、「知恵の発現」も、およそ彼が彼たる所以そのものを操っていた。その意味でたしかにアポロンはオイディプスより力が強かった。

だからといってオイディプスが「運命」の人形かというと、そんなことはない。自分の手で目を突き盲目となったオイディプスは、劇の結末、他人の手にひかれゆくが、そしてこのことは明らかに彼がかつて盲目だと侮辱したテイレシアスを思い起こすように作られているが、オイディプスがその外見同様、全ての点でテイレシアスのようになったかは別問題である。これはもはや解釈の域を越えるが、私見ではオイディプスはまだ負けていない。幸か不幸か、これが人間の人間たるところ、その栄光と悲惨である。

オイディプスの、自己の知性に対する誇り（私は「傲り」ということばは使いたくない）をもっともよく描いているのは、テイレシアスとの場面であるが、それ以前からもその傾向ははっきりよみとれる。本稿の最後に一つ、私ならこうとりたい、と考える個所を、その趣旨との関連であげておく。

二二〇―二一行

「そのようなわたしが自分だけで、何の手がかりもなしに罪の跡をたずねたとて、たいしてはかどりはのぞめまい。」

ジェブはこのようにとるべきと説明している。しかし οὐ γὰρ ἄν……ind. impf. (aor.) は、通常、事実に反する想定をその前の文章に対してたてるもので「さもなくば……しないだろう（しなかったろう）」「そうだ、もしその前で言ったことがなりたたない（ありえない）と仮定するならば、こんな奇妙なこととなってしまう（しまったろう）」という意味で使われる。従って、とりあえずそのあとに続く分詞句を無視して訳せば、ここのところは

「もし私がこの事件の局外者でなかったなら（実際は局外者だったのだが）、この私は今、遠くまで探索してはいないだろう」

となる。「局外者」は文字通りの意味である「外国人」をふまえてのアイロニーとなっている。もちろんこれだけでは意味が通らない。そこで分詞句である。

ジェブ――藤沢訳では、これを「もし何の手がかりをも持たないならば」と第二の条件にとり、暗黙の第一条件は「もし私がひとりで探索していようとも」と設定する。しかし私は分詞句を「何の手がかりを持たないままに」とする。反実仮想は分詞句の中にまで及んでいるが、条件文（プロタシス）ではなく、帰結文（アポドシス）につく。「手がかりを持たないままに遠くまで探索してはいない」ということをいいかえれば

「遠くまで行かないうちに何か手がかりを見つけているだろう」

となる。別な言い方をすれば分詞句は追跡の開始点での条件（「手がかりなしに追跡をしていたとしても）ではなく、追跡を行っている途中での条件（「手がかりを持たない事態でも生じない限り、遠くまで追跡することはおこりはしない」）である。

もうひとつ大きな相違は「遠くまで追跡する」の意味である。ジェブ訳では「隠れている敵をどんどん追いつめて行く」の意味で、遠くまで行くことが良いこととしてとられている。私がここでとっている訳し方では、遠くまで行くのは「余計な労を踏む」の意である。(10)

オイディプスは、自分があの時にライオス殺しの追及をしていたなら、自分の知性で遠からぬうちに事件は解決していたろうと自信に満ちて言明しているのである。(11) そして事実、彼が探索をはじめるや、遠くまで足跡をたどって行くことなしにライオス殺しの犯人をつきとめるのに成功した。これは彼の自負に適ったことであったが、その内容は彼の予想をはるかにこえていたことであった。彼は自分が何も見てはいなかったことを知るに至ったのである。

参考文献

R. C. Jebb, Sophocles, *The Oedipus Tyrannus*, repr. Amsterdam 1966 (=Cambridge 1914, 版数不詳)

L. Campbell, *Sophocles* vol. 1 Oxford 1871.

決してジェブに凌駕された訳ではない。

R. D. Dawe, *Sophocles, Oedipus Rex*, Cambridge 1982.
ジェブ批判として、ジェブとつきあわせて読むと真価が発揮される。
J. C. Kamerbeek, *The Plays of S. IV. The Oedipus Tyrannus*, Leiden 1967.
不可欠とはいいきれない。
研究書では
K. Reinhardt, *Sophokles*, Frankfurt a. M. 1947³
にこの劇を理解する根本のところで多くを負っている。

〔注〕

(1) K. Reinhardt, 107–108 ; E. R. Dodds, *The Ancient Concept of Progress*, Oxford 1973, 70 (='On Misunderstanding the Oedipus Rex', *Greece & Rome*, 13, 1966).

(2) しかし私生児というよりもむしろ、コリントスの王妃が誤って流産してしまい、王の怒りをおそれるが余り、あるいは長年の不妊で自分の立場が弱くなったので、捨て児を自分の子と偽った、とでもいうべきメルヒェン・モチーフを背景に想像したくなるような、ことばづかいである。もちろんたとえそういう異伝があろうとも、本劇では無視されている。

(3) Schwyzer, *Gr. Grammatik*, II 335. Kühner–Gerth, II 548.

(4) Campbell, ad loc.

(5) cf. E. *Med.* 168.

(6) Taplin, Oliver. *Greek Tragedy in Action*, London 1978, 44.

(7) 国王にとって世継ぎをもつことこそ国を守る使命であるのに、この予言はそれに反する。そういう国の安全との矛盾は、アイスキュロスの『七将』とは異なり、ソポクレスは表面に出さない。後者については

R. P. Winnington-Ingram, *Studies in Aeschylus*, Cambridge 1983, 20.（初出 *YCIS* 25, 1977, 6 は誤植あり）。

(8) エウリピデス『フェニキアの女たち』一七―二二行では、ライオスは性交を禁じられている（cf. Pearson, ad loc.）。にもかかわらず酒に負けてしまう。ソポクレスには、この種の描写がない。

(9) 「三叉路」はソポクレス以前のモチーフである。cf. Aesch. fr. 387a Radt=fr. 173 N².

(10) 似た内容の表現が S. *Aj*. 5-8 にある。

(11) この解釈は Dawe によれば、少なくとも Wunder にまで遡れる。